# 城塞

中巻

司馬遼太郎

# 城塞

中巻

司馬遼太郎

新潮社版

城塞 中巻

昭和四十七年一月二十日 発行
昭和四十七年四月三十日 六刷

定価四八〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話(編)一一一(代)
振替東京八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 新宿 加藤製本所

落丁本はお取替えいたします

© Ryotaro Shiba Printed in Japan, 1972.

# 城塞

中巻

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

# 真田父子

ここに真田氏が登場する。

大野修理は早くから、

——もし関東と手がきれたばあい、紀州九度山に蟄居させられている真田氏をまねき、それを一軍の将にしよう。

ということを考えていた。

名を昌幸という。その子とともに紀州九度山に流罪されていた。その子というのは、

「幸村」

と、後世いわれる人物で、実際には信繁という名を使っていた。が、ここでは幸村という名前を用いる。

この幸村という人物については、このころ世間ではあまり知られず、大野修理にもほとんど知識がない。父の昌幸の名のほうがむろん天下に高く、

「うまれながらにして顔に七つのあざがあるそうな」

などと生前からその身辺に英雄伝説があった。たしかに英雄といえばそうであろう。わずか五万石程度の身上で前後二度徳川の大軍を一手でひきうけ、二度ともうちやぶったという類のない戦歴をもっている。

「あれほどの食わせ者は、まあ居ない」

と、家康は肚の底からおもっていたし、食わせ者である証拠は無数にある。

真田氏は信州小県郡の真田村からおこった。しかるべき系図はあるにしても、実際にこの家が勃興したのは昌幸の父の幸隆のときで、このため名家の果てというものではなく、一族ぜんたいが戦国乱世にもみしごかれ、このため新興の野気がみなぎっている。

戦国のむかし、甲斐の武田信玄がさかんであったころ、信玄は信州の大名村上義清の領国を侵略しようとし、真田幸隆をまねいた。このあたりが信玄のいかにも謀略家らしい智恵で、幸隆という流浪の信州人に大きな利用価値を値ぶんだのである。

流浪といったが、この天文十五年ごろの幸隆は、所領を村上義清にうばわれ、信州を追われ、上州箕輪城に居候をしていた。いつか信州に帰りたいという気持が黒煙りの出

るほどにあったのを武田信玄が知り、
「わしが応援してかならず信州に帰してやるから、こうせよ」
と、策謀をさずけた。
幸隆は信州に潜入し、旧臣たちに会い、地下組織をつくりあげ、策謀をかさね、ついに成功した。つまりかれのかつての居城である真田の古城に村上方の侍五百騎をだましてひき入れ、酒宴などさせ、その油断につけ入って一時に殺してしまったのである。
――真田は忍びを用いる。
という印象が後世になるほど濃くなったが、そのことは幸隆の時代からしてそうであり、正規の戦国武将が世評を憚ってふつうはつかわない手口をその勃興の当初からぬけぬけとつかった。
「――ようやった」
と、信玄は幸隆をほめた。信玄は幸隆をさらに使い、武田軍の信州乱入のときは道案内や諜報、謀略の面ではたらかせた。真田家の戦法が、わるくいえばゲリラ戦であり、よくいえば機械細工のように巧緻な性格をもっているのは、そもそものはじめは、この幸隆にあるらしい。
幸隆は、信州で二、三万石ほどの領地をもらったらしい。
「喜悦した」
というから、幸隆以前の真田家というのはこれより小さな土豪だったようにおもわれる。
ともあれ、幸隆は武田傘下の大名になった。そのころの慣習として甲斐へ人質をあずけておかねばならない。その人質として武田家へやられたのが、三男の昌幸である。
「源五郎」（昌幸の幼名）は気がきく」
ということで信玄はこの少年を可愛がった。よほど愛したというのは、少年のころから奥近侍に使ったということでもわかる。後年、昌幸は、
「食わせ者」
といわれたが、しかし他人を信じられないたちではなく、かれはこの信玄と、のちにつかえた秀吉にだけは可愛気をみせた。
ところで昌幸は幸隆の三男である。真田家を継ぐ立場にない。そこで信玄は、武田家の一族で武藤家という家が絶家になっているのを幸い、昌幸にそれを継がせ、武田家一族の待遇をした。このころ昌幸は武藤喜兵衛と称した。
昌幸は長じて武田軍の歩兵部隊の一隊をまかせられたが、このことが、かれの独特の「真田戦法」をつくりあげるうえで重要な履歴になった。少年のころから信玄につかえたかれは、体じゅうで信玄の思考法をまなんではいる。それに加えて青年期に武田軍の実戦部隊の長になったことが、

実地に武田軍法をまなぶうえで大きかった。かれは信州人ながら、生っ粋の信玄の弟子といっていい。しかもひょっとすればその才能は信玄以上であったかもしれない。

信玄の没後、武田家は勝頼が当主になりその勢威が傾いたが、長篠の一戦で織田軍のために大敗を喫したことが武田の衰運を早めた。この有名な合戦では昌幸の兄信綱・昌輝も戦死した。このため昌幸は信州に帰り、真田家の当主になり、その後も衰運の勝頼に属しつづけた。その点、真田昌幸は決して、「食わせ者」ではない。

それどころか、勝頼の運が傾くと、一門や老臣のほとんどがかれを裏切ったり離れたりしたが、昌幸は敗残の勝頼を最後までは げましている。

かれを、

「食わせ者」

とみていたのは徳川家康であったが、昌幸のほうでもそれ以上に、

「家康ほど信じがたいやつはない」

と、憎悪しきっていた。というのは勝頼没落後、かれをほろぼした織田信長も本能寺で急死したため、天下取りの大争乱がはじまった。秀吉の勢力が急騰する一方、家康はしばらく地方勢力たろうとし、その位置をかためるため東海方面から信州、甲州一円に手をのばし、手あたりしだいに土地を斬りとった。いわば火事場泥棒のようなものであったが、このときに急造した地盤が、のちに秀吉と小牧・長久手で対戦したときの戦力になった。

真田昌幸は、天下あらそいをするような身上ではない。信州の小大名にすぎなかった。この激動する大勢力の揉みあいのなかで、

「いまはとにかく徳川どのに身をゆだねるのが最も安全」

という他の信州大名にならい、昌幸も家康に属した。しかしこの昌幸という男のおもしろさは、この信濃の小さな盆地の小大名のくせに天下取りを夢想していたところがあることだった。

――家康に属するのは、一時の方便。

と、肚のなかでおもい、他の従順な信州大名とはちがい、家康に対して相当無理な条件をもちかけて味方した。

それだけでもふてぶてしいのに、信州上田の古城を大改築して分不相応の大城にした。そのモデルを故信長の安土城にとった、ということでも、かれの壮挙がうかがえる。

ほどなく昌幸が家康から離反したのは、家康がかれの条件を実行しなかったためであった。むろん昌幸は家康から離反する前にぬけ目なく越後の上杉景勝の傘下に入った。景勝は中央で勃興した羽柴秀吉の系列に入っていたから、昌幸はこのときはじめて「豊臣方」になったといえる。

家康はさっそく信州上田城に籠る昌幸に対し征伐軍をおこしたが、この大軍が昌幸の巧妙な作戦に翻弄され、こなごなにやぶられるという奇現象がおこった。その徳川方敗北のみじめさは、家康の旗本の大久保彦左衛門の回想録（三河物語）にも、

「みな腰がぬけた」

という表現で書かれている。

――権現様（家康）は城攻めが下手。

という定評ができたもとは、ひとつにはこの信州上田城攻めの失敗が戦例になっている。

のち、昌幸は上杉景勝の傘下を脱してじかに秀吉に属し、秀吉に人質を送った。その人質が、のちの幸村である。

さらに情勢が転々して、家康も秀吉に属し、豊臣の天下がほぼさだまったとき、秀吉は関東の北条氏を攻めようとした。その軍議の席で、

「安房（昌幸）、これへ来よ」

と、秀吉は末座の昌幸を自分の膝もとまでよんだ。秀吉のひざもとには関東の地図がのべられており、その地図のそばに、いまは秀吉の筆頭大名になっている家康がすわっている。

「ご免」

と、昌幸は多年の仇敵である家康に会釈し、すすみ出た。

（なんとありがたいことか、家康めとわしは同座したぞよ）

ということが、田舎育ちで自負心が極度につよい昌幸をひどくよろこばせた。このあたり、秀吉は、この懐柔のむずかしい田舎天才の心をよく見ぬいていた。

「安房よ、そなたを中仙道の先鋒にするぞ」

と、秀吉はさらに昌幸のうれしがることをいった。当然、昌幸は有頂天になった。

――このひとのためならば。

と、一面感激家でもある昌幸がそう思うようになったのは、このときからであろう。秀吉は猛獣使いの呼吸を心得ていて、この田舎者に対し、このあと、

「家康と仲よくせよ、それ、世間には長いものには巻かれよということわざもあるではないか」

と、昌幸の肩をたたき、やがて両者のあいだを取りもってやった。

家康も、無用に仇敵を作ることの不利は知っている。北条征伐がおわったあと、昌幸と姻戚関係をむすびたいと思った。ただし昌幸分際の大名に家康の血縁をやるのは釣り合わない。さいわい家康の重臣本多平八郎忠勝に一女があり、才女の評判が高かった。これを養女とし、昌幸の長男信幸にめあわせようとし、秀吉のゆるしを得た。

縁談がきまったとき、当時二十五歳になっていた当の信

幸が、
「もし将来、豊臣・徳川の両家のあいだで不慮の大事がおこったばあい、いかがいたしましょう」
と、父の昌幸にきいた。この花婿がこの質問を発したのは天正の末年のことであり、関ヶ原役より九年前、大坂ノ陣におけるこの物語のこの時点より二十三年前のことであることをおもうと、真田家という大名の奇妙さがわかるであろう。この信州の小大名は、他の多くの小大名が、秀吉のいう「長いものには巻かれよ」式に時勢の流れのなかに順応してゆくなかで、ひとり、
——豊臣か徳川か。
という分不相応な大主題をおのれの存立の命題にするというところがあった。これを観念過剰という目でみればこっけいな情景だが、真田家では大まじめな命題であった。昌幸という、小英雄のあくのつよい個性によるものかもしれない。
昌幸は長男信幸のその質問に対し、にやりと笑って、こう答えている。
「それは、そのほうの心まかせよ」
要するに嫁の縁につながる徳川についてもかまわない、お前のおもうとおりにせよ、というのである。
なにぶん豊臣の天下のさだまった時期でのことだから、いわば一場の戯談であるかのようであった。しかしあるいは物事を筋みちでつきとめる信州人には言葉のあそびというものはありえないことかもしれない。
というのは、このことが現実になってあらわれたのが、関ヶ原の合戦であった。
この合戦の直前、家康は豊臣系の諸大名をひきいて関東の小山（おやま）にいた。大坂で石田三成が旗あげしたという変報が入ったとき、家康は十分に裏工作をして諸大名の心を自分にひきよせておき、そのうえで形式的な軍議をひらき、
「御一同のなかで、大坂に加担したいとおもわれるお人があるかもしれない。そういうお人には決して邪魔をせぬからこの小山より国へ帰られよ」
と、いった。家康はたれもないと安堵していた。ところが元来家康ぎらいの真田昌幸だけがひとり立ち、
「拙者は、三成に加担する」
と宣言し、さっさと陣をはらって信州上田へ帰ってしまったのである。日本史上、これほど鮮明な進退とそれに必要な勇気を示した男の例はきわめてすくない。
このとき、長男の信幸は家康側に残った。つまり天下が二つに割れたように、真田の家も二つに割れた。といって昌幸は長男が敵であったわけでなく、その行動を十分是認していた。

「どっちが勝とうが負けようが、真田の家は残る」
という、いわば転んでもただで起きぬというしぶとい計算を、昌幸は肚のなかで立てていたにちがいない。
昌幸は、のちに高名になる、
「幸村」
という次男をつれて小山の陣をひきはらった。この幸村はきわめて宿命的なことに、石田三成の親友であった大谷刑部少輔吉継の娘をもらっていた。幸村は少年のころから秀吉の手もとで養われ、いわばその薫陶下で成人した。幸村としては岳父が西軍の謀将であるということもあり、また豊臣家にかくべつの因縁があるということもあって、西軍につくほうが感情として自然であった。
この父子は信州上田城へ帰ると、城をかため、計略を密にし、徳川軍の来襲を待った。徳川軍は、江戸を二手にわかれて出発した。家康は東海道コースをとり、その子秀忠は中仙道コースをとった。
——美濃（関ヶ原は美濃）で落ちあおう。
ということでそれぞれ出発したが、この徳川秀忠軍を一手にひきうけたのが昌幸・幸村の信州上田城であった。真田勢は小勢ながら秀忠の大軍をさんざんに翻弄し、撃破し、かれらを足踏みさせ、ついに関ヶ原合戦に間にあうことができないようにした。昌幸はその生涯で徳川軍を二度やぶったことになる。
が、関ヶ原における主力戦で西軍がやぶれたため、昌幸・幸村は敗者になった。
戦後、長男の真田信幸が家康に哀願し、
——私の戦功にかえて父の命をおたすけくだされたい。
と、舅の本多忠勝や井伊直政をもうごかし執拗にたのんだため、家康も思いなおした。
「家康としては、当然のことよ」
と、昌幸はふてぶてしくいったという。かれは戦後もなお、信州上田城で戦備を解かずに形勢をみていた。もし家康が命をとるというなら、昌幸は三たび徳川の大軍をひきうける気概を示した。家康としてはあやうく天下をとった以上、いままた攻城軍をおこして風雲のモトをつくれば天下はどうみだれるかわからない。
「父子（昌幸・幸村）を高野山に追放せよ」
ということで、信幸の助命嘆願をうけ入れた。真田領も豊臣期のままの十一万五千石で、信幸に対し安堵した。
昌幸と幸村の身柄は、浅野家のあずかりになった。この当時、紀州は浅野家の領国で、その紀州に高野山がある。流謫の場所は、高野の山頂ではなく、その北麓の学文路村のとなりの九度山という村であった。村は台地にあり、下を紀ノ川がながれている。



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

この父子はながい歳月をここですごした。

——もうゆるされるのではないか。

という風評がしばしば出たのは、おなじ西軍加担の罪によって高野山に蟄居させられた大名の数人がおいおいゆるされて山を降りたからである。北条氏直は高野蟄居一年でゆるされ、ゆるされたばかりか河内狭山で一万石をもらった。毛利輝元もゆるされたし、蜂須賀家政もゆるされた。

が、昌幸・幸村だけはゆるされなかった。

「あれをゆるせば、なにをくわだてるか」

という恐怖が、家康にあったことはたしかであった。家康にすれば昌幸は札つきの乱世製造人であったのである。

その昌幸が、いわゆる冬ノ陣のはじまる三年前の慶長十六年の春から病みはじめ、その六月四日、永眠した。六十六歳であった。

「このまま朽ちるほど無念なことはない」

と、病が重くなったころ、昌幸はしきりにつぶやいているのを、身辺の者は知っていた。昌幸はかねて関東と大坂のあいだに去来する暗雲を観望している。かれは、

——いずれは大戦になる。

とみており、そのときは老骨ながらすぐさま大坂に入城し、総指揮をとり、家康に対して三度目の大戦勝を得てやろうというのが、この執念ぶかい老作戦家の唯一の希望であった。それがどうやら事もおこらぬまに老衰してゆく、それが無念である、というのである。

その死のまぎわに、昌幸らしい挿話がある。「真武内伝」や「武将感状記」に書かれている。

「重病を受けて、まさに死なんとす。よって嘆息し、我に一つの秘計あり、これを用いずして徒らに死なんこと口惜し、と」

からはじまっている。

枕頭にいた幸村がききとがめ、そのこと、のちのちの家訓後学にも致しとうございますゆえお洩らしくださいませぬか、というと、昌幸はそっぽをむき、

「汝ノ及ブトコロニアラズ」

と、いった。これに対し幸村は、

——深ク恨ミタル気色ニテ。

という表情をつくり、なるほど自分は父上にくらべれば庸愚でございます、というと、昌幸はそういう意味ではない、といった。

「そのほうは、才はわしよりすぐれているかもしれない。が、若くして九度山に蟄居したため世間にその閲歴を知られていない。だからこの策をもって大坂の城衆を説いても、たれもがそのほうを信用せぬ。世間のことは、要は人である。わしという男が徳川の大軍と二度戦い、二度ともやぶ

ったということを世間は知っている。そのわしがこの策を出せば大坂の城衆も大いに悦服し、心をそろえてその策どおりにうごくだろう。妙案などはいくらでもある。しかしそれを用いる人物の信用度が、その案を成功させたりさせなかったりするのだ。そのほうではとうてい無理である」

といったが、幸村がなおもせがんだのでついに明かした。

## 紀州九度山

真田父子が流謫の歳月をおくった紀州九度山というのは、紀ノ川の河原を見おろす台地であることはすでにのべた。

上方のことばで、

「くど」

といえば、カマド、ヘッツイのことをいうのだが、なるほど紀ノ川の河原からこの丘を見あげると、カマドに似ていなくもない。

この丘にある九度山村は、ふるくから高野山の寺領であり、高野山への登り口であり、ふるくはここに高野山（金剛峰寺）の政所があった。それだけに村というより町といったほうが似つかわしいほどに人家が密集し、人文的な歴史もふるい。中世のころには高野の僧兵でも住んでいたのか、城下町の多くがそうであるように町のなかの道路は迷路のように入りくみ、なにやら外敵の襲来を想定した防衛上の配慮があったのかとさえおもえる。

九度山における最大の寺院は、慈尊院という古刹である。次いで名のある寺として、

「善名称院」

という文字のふんいきのいい寺号をもつ寺がある。昌幸・幸村の父子が九度山にいたときは、この寺はなかった。じつはこの寺そのものが真田屋敷で、かれらが九度山を去ってからのちに土地のひとびとが寺にし、かれらの滞在時代の余風を慕った。土地のひとびとに評判のいい流人だったらしい。

九度山滞在中、かれらの経済生活はどうだったのだろうか。

べつにその日にこまるという生活ではなかったらしい。右の屋敷も、かれら自身が建てたものであった。なにぶん、徳川方についた長男の信幸が、信州で十一万五千石の大名として存在しているのである。その信州真田家やその重臣たちから多少の仕送りがある。

たとえば、昌幸が生存のころ、真田蔵人という本家の重

臣に無心をいったりしている手紙がのこっている。
「そこもとに臨時の合力を四十両たのんだが、そのうちの二十両がとどいた。しかしなにぶん物入りが多くてこまっている。あとの二十両も、いそいで送ってもらいたい」
というようなあんばいである。
そのうえ、両人を監視すべく幕府から命ぜられている紀州の国主浅野家（のち広島へ移封された）から、五十石ずつ合力があった。
その浅野家の重臣からも、物品がときどきとどく。昌幸は大ぶりな戦国人だったから、すこしも卑下せず、欲しいものは自分から堂々とねだったりする。浅野の某あて、
「その後、ごぶさたしている」
と、手紙の冒頭にそっけなくあいさつし、いきなり、
「壺に焼酎を詰めて送ってもらいたい」
と、そういう用件を書いている。それも送り方に注文をつけている。
「壺の口をよく詰め、その上油紙などでよく張って送ってもらいたい」
いかにも大名らしい堂々たる無心状であり、さらにいえば、その注文のつけかたに昌幸らしい細心がうかがえる。
家族は、多かった。
「山ノ手殿」
と、真田家でよばれている昌幸の奥方も九度山住まいである。この奥方は京のうまれであった。菊亭大納言晴季という豊臣びいきの公卿のむすめであった。このため九度山真田家の奥むきは、万事京風であった。幸村の奥方も、一緒である。このひとは関ヶ原の敗将大谷刑部吉継のむすめであることは、すでに触れた。その両夫人についている侍女も、四、五人はいる。
幸村夫妻が父とともに九度山にきたのは慶長五年十二月十三日の寒い日で、このとき三十をすぎたばかりであった。夫婦に子がなかった。ところが九度山にきてすぐ、大助という長男がうまれた。ひきつづいてこの蟄居中、むすめが二人、男の子がひとりうまれている。いわば、大家族であった。
ほかに、重臣やら近習の士、それに侍医などが一緒にきている。主君とともに牢人した総家来衆は、十六人であった。名を書く必要もないが、ついでに書いておく。以下、ほぼ身分の順である。
池田長門、原出羽、高利内記、小山田治左衛門、田口久左衛門、窪田角左衛門、関口源左衛門、河野清右衛門、関口忠右衛門、青木半左衛門、飯島市之丞、石井舎人、前島作左衛門、三井仁左衛門、大瀬義八
侍医青柳清庵
こういう家来衆は、主として真田屋敷にはすんでいない。

真田屋敷のとなりやちかくに小さな屋敷を建てて、田畑を耕して自活している。

耕作といえば、昌幸も幸村も、屋敷うちに畑を持ち、みずからたがやして野菜をつくっていた。これは家計上の理由より、運動も不足になることをおそれたからであった。かれらは幕府への遠慮のため、馬術その他武士としての日常の鍛練をすることをつつしんでいた。筋肉を萎えさせないためには、百姓しごとしかない。ときには幸村は山へゆき、柴も刈った。

余暇には、読書をした。

「看経もしている」

ということに、表むきはなっていた。経を読む。僧としての暮しである。

高野は真言宗だが、この父子は自分の家の宗旨が禅宗であるため、禅僧になったつもりであった。その法名として父の昌幸は、

「一翁干雪」

というもっともらしい名をつけている。子の幸村は、

「伝心月叟」

である。この父子のおもしろさは、名前をそのように付け、幕府にも浅野家を通じてとどけてもらってるくせに、実際には髪も剃らずお経も読まず、いっさい出家らしいことをしない。浮世に十分の未練をのこしている証拠であり、この隠棲は偽装である証拠であった。この父子はあくまでも武将として生きようとしていた。

この九度山での真田主従のくらしのなかで、いまひとつ特徴的なものがある。

「真田ひも」

をつくっていることであった。

ひもについて、すこし語らねばならない。

日本人の各種の服装や儀典のための道具、あるいは器物、甲冑、刀の柄巻にいたるまで、古来ひもの占める位置は大きい。丈夫で使いやすくしかも美術的であらねばならないという要請のもとにさまざまなひもが工夫されてきたが、とくに打紐のなかでは真田紐にまさるものはない。

打紐というのは、絹糸やもめん糸を組んで打ったひものことで、真田紐も絹のものともめんのものとがある。

この発明者は、真田昌幸であった。昌幸は生涯を乱世に生きた戦術家でありながら、その才能のゆたんならなさはこういうところにまでおよんでいる。発明したのは、天正年間であるという。あるいは昌幸そのひとの発明でなく、領内の者の発明かもしれないが、伝説によると、

「どうも刀の柄巻が切れやすい」

というので、昌幸がその緘し方や打ち方に一工夫こらし、

やがて作りあげたものを自分の使っている貞宗の太刀の柄巻に用いたところからおこったという。元来、信州は打紐作りのさかんな土地で、そういう素地があったからこのような新工夫も成り立ったのかもしれない。

真田主従がこの紀州九度山で隠棲中、家来たちの自活の工夫もせねばならぬ必要から、

「真田紐をつくって売ればどうか」

ということになり、十六人の家来たちやその郎党、家族が、それを作りはじめた。これが上方で大きな人気を博した。公卿も武家も商家も真田紐を大いに必要とした。具足のひもや刀の柄巻に必要なだけでなく、什器の箱の締めひもなどにいたるまで真田紐でなければならぬようにまでもてはやされた。色はさまざまあるが、おもに萌黄色(青と黄のあいだの色)であった。

考えてみると、九度山真田家というのは容易ならぬ家のようである。武家でありながら、職人であり商人である生活と性格をもっていた。かれらはこの生産と販売をとおして、ただの大名や武士ではうかがうことのできぬ世間のうごきや機微を感得できたにちがいない。

さらにいえば、かれらはこの真田紐の販売を通して、情報網をもつことができた。

十六人の家臣団は、それぞれ家族もおり、またそれぞれ徒歩侍や若党をつれてこの九度山にきている。そのなかで気のきいた者が組をつくり、大坂や京あるいは上方の周辺の城下町へ真田紐を売りに行った。それらが、隠密の役目をした。

「いま関東はこういう情勢である」

とか、

「大坂の城内の空気はこうだ」

といったふうな消息にこの九度山真田家はじつに精通していた。それが、真田紐売りを通してであることはまぎれもないことであり、このきわだってすぐれた情報収集活動が、後世さまざまな伝説をうむまでになった。真田十勇士などといった華麗な伝説のひとびとも、この真田紐売りの働きのなかからうまれ出てきたのであろう。猿飛佐助に相当する人物もいたであろうし、三好晴海入道や海野なにがしなども、似たような人物は当然いたにちがいない。

大坂は、商都である。紀州九度山から出てくる真田家の陪臣(直参でなく、直参の家来。この衆は直参とちがい、身分がひくいため行動は自由であった)たちは商人の姿をして問屋や小間物屋に入ってくると、

「ああ、真田衆が見えた」

とひとびとはなつかしんだし、いつのまにか顔も売れて、荷をかつぎながら街路をゆくと、

「あのひも売りは真田衆だ」

というふうに、ひとびとは親しみと敬意をこめておもったにちがいなかった。そのひも売りの衆が、大坂籠城のとき具足姿もいかめしい武者として町のひとの前に再登場したため、

「ふしぎなひとたちよ」

という驚きがおこり、その驚きが伝承され、やがて徳川末期から明治・大正にかけて大坂でできあがった家康ぎらいの感情にむすびつき、真田の勇士たちが神出鬼没するという華やかな物語ができあがったのであろう。

ともあれ、九度山真田家というのは、その十四年間というながい流人のくらしのなかで、表むきは父子とも僧名を名乗っておこないすましているとはいえ、裏では領地を安堵されている浮世の大名たちよりも多忙な生活をしていた。

真田昌幸が慶長十六年六月四日にこの九度山で死んだことはすでに触れた。昌幸の死は、戦国乱世がすでに歴史になりつつあることを、時勢に過敏なひとならば感じたにちがいない。昌幸は武田信玄に仕え、家康とは三方ヶ原で戦い、またのちに武田軍の一将として織田信長の軍と長篠で戦った。かれの少壮のころは北方に上杉謙信がおり、小田原には北条氏政がいたりして、かれの環境そのものが戦国群雄の壮大な劇であった。初老になって秀吉に仕え、秀吉にはとくべつの会釈をうけた。石田三成とは懇意で、大谷刑部吉継とは姻戚の仲になった。それらはすべて――家康、あるいは伊達政宗、藤堂高虎などをのぞいては――過去のひとになった。昌幸の死によって、あるいは英雄時代は去ったといえるかもしれない。

が、残された真田幸村にとっては、そうはおもえなかった。幸村は本来物しずかな読書人であったが、しかし父の昌幸の熱っぽい生き方と戦国の気風の影響をうけすぎて成人し、つねにどの戦場でも昌幸のそばにいた。その昌幸の死を送って幸村がおもったのは、

――真田の旗をもう一度天下の一角にあげたい。

ということであった。

幸村の幸福と不幸は、父昌幸という稀代の戦術家の次男にうまれたことであった。しかも父が長兄の信幸を措いて幸村の才を愛し、戦場にはかならずつれて行って合戦の駈け引きや軍配の振りかたを実地におしえ、さらには九度山における十数年の閑居の歳月のなかで、まるで父の研究室に入ったかのように個人教授をうけつづけたことである。

しかも父の生涯の戦歴のなかで、つねにその敵は、徳川家康であった。どういう運命がそうさせたのか、奇妙なほどに家康ばかりなのである。自分を天才であると信じてい



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com